

負の罰の例として妥当なのはどれか。

1. 勉強をしなかったら授業の単位を落としたので、次の試験からは勉強するようにした。
2. 食べ過ぎでおなかが痛くなったので、次からはあまり食べ過ぎないようにした。
3. いたづらをしたらいつももらっているおやつを抜かれたため、いたづらをしなくなった。
4. 授業中にうるさくしたので叱られたが、次からも静かにしなかった。
5. 遅刻をして怒られたため、次からは遅刻をしなくなった。

(正答 3)

ハイダー（Heider, F.）による態度形成の理論に関する次の文中のア～ウに入るものがいずれも妥当なのはどれか。

ハイダーによる  では、人が対象について持つ態度は、他者との関係によって左右されると考える。例えば、不均衡状態は、知覚者、他者、態度対象の三者のそれぞれの関係について、  の場合に生じるとし、このような状態のときに不快な緊張状態に陥り、それを解消しようとする力が生じるとした。この理論は  と呼ばれる理論群の代表的なものである。

ア	イ	ウ
1. バランス理論	二つが正で一つが負	認知的評価理論
2. バランス理論	二つが正で一つが負	認知的斉合性理論
3. バランス理論	二つが負で一つが正	認知的評価理論
4. 認知的不協和理論	二つが正で一つが負	認知的評価理論
5. 認知的不協和理論	二つが負で一つが正	認知的斉合性理論

（正答 2）

テイラー（Taylor, F. W.）の科学的管理法に関する記述として妥当なのはどれか。

1. 生産性・効率性は、労働者の誇りなどの情緒的要素や人間関係などの社会的要素の影響を受けるとした。
2. 組織を権力闘争の場として捉え、組織の権力構造が、経営戦略の行方に重要な影響を及ぼすことは避けられないと考えた。
3. 組織を機械のイメージで捉え、生産効率の面から作業行動を分析し、労働者の賃金の支払い方や休憩時間の長さ、照明の明るさなどを設定することを提唱した。
4. 組織を社会や環境の変化に適応して発達する、一つのまとまりを持つ生命体のように捉え、環境に適応していかなければ組織の存続は難しいとした。
5. 組織を集合的情報処理を行うものとして脳のイメージで捉えようとし、外部からもたらされる情報を正確に処理して、的確な判断を下すことが大切であるとした。

（正答 3）